



改造文庫

第二部 第四十三篇

一の握の砂
悲しき玩具

石川啄木著

改造社出版



昭和四年二月一日印刷
昭和四年二月三日發行
昭和九年十月五日百七十版



發

兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目四〇番地

改

造

社

振替口座東京八四〇二番
電話芝(43)自一一二一
至一一二四番

(留山製)

改造文庫 第二部 第四十三篇

一握の砂
かなしき玩具

定價二十錢

著者

石川啄木

發行者

山本美

印刷者

福山福太郎
東京市牛込區西五軒町三十四番地

改 造 文 庫
第二部 第四十三篇

一の握りの
悲しき玩具

石川啄木 著



改 造 社 出 版

一握の砂の玩具 悲しき玩具 目次

一握の砂	五
我を愛する歌	六
煙	四
秋風のこころよさに	七〇
忘れがたき人人	八三
手套を脱ぐ時	二七
悲しき玩具	一四六
解題	一九六

一握の砂

我を愛する歌

東海^{とうかい}の小島^{こじま}の磯^{いそ}の白砂^{しろすな}に

われ泣^なきぬれて

蟹^{かに}とたはむる

*

頬^ほにつたふ

なみだのごはす

一握^{ひとくわ}の砂^{すな}を示^{しめ}しし人^{ひと}を忘^{わす}れず

*

大海^{たいかい}にむかひて一人^{ひとり}

七八^{やうか}日^か

きなむとすと家^{いへ}を出^いでにき

いたく錆びしピストル出でぬ

砂山の

砂を指もて掘りてありしに

*

ひと夜さに嵐來りて築きたる

この砂山は

何の墓ぞも

*

砂山の砂に腹這ひ

初戀の

いたみを遠くおもひ出づる日

*

砂山の裾によこたはる流木に

あたり見まはし

物言ひてみる

いのちなき砂のかなしさよ

さらさらと

握れば指のあひだより落つ

*

しつとりと

なみだを吸へる砂の玉

なみだは重きものにしあるかな

*

大といふ字を百あまり

砂に書き

死ぬことをやめて歸り來れり

*

目さまして猶起き出でぬ兒の癖は

かなしき癖ぞ

母よ咎むな

ひと塊の土に涎し
泣く母の肖顔つくりぬ
かなしくもあるか

*

燈影なき室に我あり
父と母

壁のなかより杖つきて出づ

*

たはむれに母を背負ひて
そのあまり軽きに泣きて
三歩あゆまず

*

飄然と家を出でては
飄然と歸りし癖よ
友はわらへど

ふるさとの父の咳する度に斯く
咳の出づるや
病めばはかなし

*

わが泣くを少女等きかば
病犬の

月に吠ゆるに似たりといふらむ

*

何處やらむかすかに蟲のなくごとき
ところ細さを
今日もおぼゆる

*

いと暗き
穴に心を吸はれゆくごとく思ひて
つかれて眠る

ところよく

我にはたらく仕事あれ

それを仕遂げて死なむと思ふ

*

こみ合へる電車の隅に

ちちこまる

ゆふべゆふべの我のいとしさ

*

浅草の夜のにぎはひに

まぎれ入り

まぎれ出で来しさびしき心

*

愛犬の耳斬りてみぬ

あはれこれも

物に倦みたる心にかあらむ

鏡とり

能ふかぎりのさまさまの顔をしてみぬ
泣き飽きし時

*

なみだなみだ
不思議なるかな

それをもて洗へば心戯けたくなれり

*

呆れたる母の言葉に

氣がつけば

茶碗を箸もて敲きてありき

*

草に臥て

おもふことなし

わが額に糞して鳥は空に遊べり

わが髭の

下向く癖がいきどほろし

このごろ憎き男に似たれば

*

森の奥より銃聲聞ゆ

あはれあはれ

自ら死ぬる音のよろしさ

*

大木の幹に耳あて

小半日

堅き皮をばむしりてありき

*

「さばかりの事に死ぬるや」

「さばかりの事に生くるや」

止せ止せ問答

まれにある

この平なる心には

時計の鳴るもおもしろく聴く

*

ふと深き怖れを覚え

ちつとして

やがて靜かに臍をまさぐる

*

高山のいただきに登り

なにがなしに帽子をふりて

下り來しかな

*

何處やらに澤山の人があらそひて

圖引くごとし

われも引きたし

怒る時

かならずひとつ鉢を割り、
九百九十九割りて死なまし。

*

いつも逢ふ電車の中の小男の
稜ある眼

このごろ氣になる

*

鏡屋の前に來て、

ふと驚きぬ

見すばらしげに歩むものかも」

*

何となく汽車に乗りたく思ひしのみ」
汽車を下りしに

ゆくところなし